

〈拒み〉 〈破壊する〉 女・イズミ

—— 村上春樹「国境の南、太陽の西」における「虚無」の様相 ——

山 根 由美恵

はじめに

主人公ハジメのクロニクルである「国境の南、太陽の西」(一九九二)は、一人称の手記として主人公の価値観が強烈に反映されている。ハジメ中心の世界において、高校生の時の恋人イズミは「吸引力」がない女性と認定され、運命の女性¹ 島本さんや妻・有紀子の影に隠れてきた。村上文学における女性造形は、男主人公と簡単に肉体関係を持つ都合の良い女であることが多く指摘されてきた。² 対して、少数ながら男性との肉体関係を「拒む女」たちがいる。彼女たちは例外なく救われない運命を辿りながら、男主人公たちの運命を変えてゆく。³ 「国境の南、太陽の西」のイズミも「拒む女」の一人であり、主人公ハジメの傲慢さを映し出す鏡となっている。本稿では「拒む女」としてのイズミに焦点を当て、男のエゴイズムを相対化する重要な存在として、その人物像を捉え直してみたい。

イズミについて、山崎真紀子氏³は「始はもともとからイズミが発する問いかけに真摯に答えようとせず、自分の抱えている欠落感をイズミに向かって無意識のうちに投影し、無言のうちに彼女には何か欠けているとして否定し続けてきた」と、「否定される女」として捉えている。木股知史氏⁴は「観念にとりつかれた「僕」の心の深層での願いが表情を失ったイズミに見事に成就されている」とし、「僕」にとつての他者のありようを象徴するものがのっぺらぼうのイズミであると論じている。鈴木智之氏⁵は「この偶発性の支配する世界において、確かなものを求めているがゆえに、必然的に破綻へと導かれる生」これが「イズミ」の体現するものだといえるだろう」とイズミの破壊の必然性についての確に述べている。

イズミの人物像について精緻に分析している矢野美沙伎氏⁶は、次のように結論づけた。

イズミを傷つけた「僕」と従姉の性交渉はイズミへの「愛情」、「罪悪感」、さらにはイズミとの「未来」に全く関わりのないところで行われたことであり、そのことは彼女を決定的に傷つけてしまう。深海のように「何もかも音もなく死に絶え」てしまったイズミの顔は島本の微笑みの裏にある無感情の顔の再現である。「僕」はイズミを通してようやく、自分の捉われていた幻想の影にある死の恐怖に気づく。「僕」は今まで、島本を求めることで愛する人を傷つけ、同時に深く傷ついてきた。イズミはそんな「僕」がまた傷つくことのないよう、この作品の中心を流れていた「僕」と島本の幻想を破壊する役割を果たしたのである。

矢野氏は「この作品の中心を流れていた「僕」と島本の幻想を破壊する役割を果たした」とイズミの役割について卓抜した分析を行っている。稿者は矢野氏の述べるイズミの役割(幻想を破壊する)に首肯しつつ、イズミのもたらした破壊の性質について、再考の余地があると考えている。氏は「僕」がまた傷つくことのないようにといったイズミの「僕」への思いについてふれていた。しかし、終盤のイズミの禍々しさには、「僕」がまた傷つくことがないようにといった思いが読み取れるのだろうか。本稿では、「否定される女」、「僕の深層での願い」の表象、「また傷つくことのないよう」といっ

たハジメというフィルターを通した受け身で捉えられる女性としてはなく、自ら〈拒み〉、〈破壊〉し、「虚無」を生み出す能動的な女としてのイズミを捉えたい。イズミの生み出す「虚無」の様相は、「ノルウェイの森」の焼き直し、失敗作と評価されることも多かった「国境の南、太陽の西」の新たな側面を浮かび上がらせると思われる。

一、〈破壊する〉女——ヒエラルキーの無化——

「国境の南、太陽の西」は、女性のヒエラルキーが明確な形で描かれている。ハジメが「吸引力」を感じる点で女性が線引きされ、その後に序列付けが行われている。最上位は島本さんである。一人っ子は欠落を抱えた存在と強迫観念のように感じていたハジメの前に初めて現れた一人っ子であり、全てを理解してくれる存在であった。再会後は、彼女がいらない世界は月面にいるような生命のない味気ない世界と評されるほど、ハジメにとって全てが完璧な運命の女性である。しかし、再会した島本さんは「死」の気配を纏っており、ハジメを死の世界に誘うエロスとタナトスを併せ持つ存在といえる。二番目の位置は妻の有紀子になる。二十代に失意の生活を送っていたハジメが久しぶりに「吸引力」を感じた相手であり、結婚し、二人の子供をもうける。しかし、ハジメの欠落を埋める女性ではなく、島本さんと再会後は彼女よりも下にされる。三番目はイズミの従姉

である。高校生の時に強烈な「吸引力」を感じ、話をしないまま狂ったように性交を繰り返した。しかし、彼女の人格は殆ど問題とされしていない。

テキストで語られる女性の中で、最も低い位置にいるのがイズミである。「僕が困惑し失望したのは、僕がイズミの中にいつまでたっても僕のためのもの、(引用者注 傍点は原文にあり。以下同様)を発見できない点にあった」。彼女は美質が多くにあるにもかかわらず「僕のためのものを発見できない」などと描かれ、語り手のハジメから「彼女には決定的な何かが欠けていた」といった魅力無しの烙印を押される。山崎氏が的確に述べるように、ハジメは自らの欠落感を投影して、彼女が欠けていると逆に否定的に価値づけ、自らの優位性を作り上げていた。高校三年生の時、イズミの従姉との激しい肉体関係の露見によって、ハジメはイズミを決定的に傷つけ、そのまま大学入学と同時に東京の生活を始める。

ハジメは逃避行しようとした島本さんに去られ、有紀子との結婚生活をそのまま続けるべきか答えを出せず、島本さんの幻想にとらわれていた。島本さんと思って追いかけた人が別人であったことに気づき、落胆していたハジメの前にイズミは現れる。イズミは全く表情のない人間になっていた。

彼女の顔には表情というものがなかったのだ。いやそれは正確

な表現ではない。おそらく僕はこう言うべきだろう。彼女の顔からは、表情という名前で呼ばれるはずのものがひとつ残らず奪い去られていた、と。それは僕に家具という家具がひとつ残らず持ち出されてしまったあとの部屋を思い起こさせた。彼女の顔には感情のかけらすら浮かんではいなかった。まるで深い海の底のように、そこでは何もかもが音もなく死に絶えていた。そして彼女はそその表情のかけらもない顔で、僕をじっと見つめていた。彼女はおそらく僕を見つめていたのだと思う。すくなくともその目はまっすぐ僕の方に向けられていた。でも彼女の顔は僕に向かって何も語りかけてはいなかった。もし彼女が何かを語ろうとしていたのだとすれば、彼女が語りかけていたものは果てしない空白だった。

自分の傲慢さにより、人生を狂わされ、表情つまり人間性そのものを奪われた人間をハジメは目の当たりにする。彼女は「果てしない空白」をハジメに突きつける。何もかもが死に絶え、今後何も生み出さない彼女の顔。ハジメは「まるで彼女の語りかけていた虚無が僕の中にすっぽり入り込んでしまったみたい」と捉えており、イズミの顔は「虚無」と同義となっている。この「虚無」を、本稿ではニーチェのニヒリズム「価値、意味、願望の徹底的拒否」と関連させたい。イズミの顔はこれまで「砂漠」の相貌や、無感動

として捉えられてきたが、ニヒリズムとして捉えると結末の解釈が
変わってくると思えるからである。

イズミの「虚無」のまなざしを受け、ハジメは激しい吐き気や体
中から嫌な匂いが漂ってくるように感じる。「かつて島本さんが優
しく舐めまわしてくれた僕の体ではなかった。それは不快な匂いの
する中年の男の体だった」。イズミはハジメという存在そのものを
「不快な匂いのする中年の男」であると現実を引き戻させ、「抜け殻」
となり「虚ろな音」が響く「からっぽ」の存在にさせる。

イズミはそこで僕を待っていたのだ、と僕は思った。彼女はお
そらくいつもどこかで僕のことを待っていたのだ。どこからの
街角で、どこかのガラス窓の奥で、彼女は僕がやってくるのを
待っていたのだ。彼女はじっと僕を見ていたのだ。僕にはそれ
を見ることができなかっただけのことなのだ。

イズミとの邂逅後、ハジメはほとんど誰とも口をきくことができ
ない状態になり、島本さんの幻影と残響が時間をかけて薄らいでゆ
く。島本さんの幻影だけではなく「僕の中にあつた何かが消えて、
途絶え」る。島本さんに去られたハジメは、店の経営に熱意を抱く
ことができなくなっていた。「それはもうかつてのあの精妙で鮮や
かな色彩を帯びた空中庭園ではなかった」。ハジメは店(空中庭園)

を作り上げることの虚しさを感じ始めていたが、それを決定的に破
壊するのがイズミであった。「幻想はもう僕を助けてはくれなかつ
た。それはもう僕のために夢を紡ぎ出してはくれなかつた。空白は
どこまでいっても空白だった」。ニーチェは「ニヒリズムとは何を
意味するのか?——至高の諸価値がその価値を剥奪されるという
こと」(『権力への意思』)と述べている。島本さんという至高の女
性の幻想に囚われていたハジメは、イズミの「虚無」のまなざしに
よって、その幻想を破壊され、価値を剥奪されるのである。

物語の終盤は、最下層の女性が最上位の女性の幻想を破壊する
という構図となっている。稿者が強調したのは、「彼女はおそらく
いつもどこかで僕がやってくるのを待っていた」という点である。
彼女は「否定される女」ではなく、ハジメを「否定する女」なのだ
ある。イズミはハジメの傲慢さを顕在化させ、ハジメの作り上げた
序列(ヒエラルキー)や空中庭園の価値を無化させる。自らが「虚
無」を体現することで、相手の幻想を破壊し、ニヒリズムの世界へ
誘うのである。

二、イズミはなぜ人格が破壊されたのか

—二人の「拒む女」—

イズミは「表情のない顔」でハジメを見つめることで、ハジメの
幻想や序列を破壊し、無化させた。このような「破壊する」女はど

のようにして生まれたのか。本項ではイズミの人物像と同じ「拒む女」である嘉子（「我らの時代のフォークロア」一九八九）との比較から捉えたい。嘉子との対比により、ハジメの裏切りがイズミの人格を破壊し、「表情のない顔」の人間になる理由が鮮明に見えてくるからである。

嘉子とイズミは恋人と「服」を着たままベッティングをし、肉体関係を「拒む」同型の女性として設定されている。拙稿で述べたように、嘉子は自我の形成に失敗し、その歪みを「服」で覆い、愛する男性を受け入れられなかったが、イズミの場合は違う理由で「服」という砦を築いている。イズミが「服」を脱がない理由について、ハジメは「イズミはとても用心深かった。臆病なわけではない。しかし自分が何かみっともない状況に追い込まれるということが、彼女には性格的に耐えられなかったのだと思う」とその用心深さを強調している。また、イズミは何度もハジメに「怖いのよ」と傷つくことを恐れる心情を伝えてもいる。イズミは用心深く、自らが傷つく状況になることを極端に恐れる性格であった。

また、イズミは嘉子と同じく、ある種の「枠」に縛られた女性として性格づけられている（彼女はある種のことがらに対してはいささか頑固にすぎたし、想像力に欠けていると言えなくもなかった。彼女はそれまで自分が属して育ってきた世界からなかなか足を踏みだそうとはしなかった）。テキストは一九六〇年代に思春期

を迎える設定（シックスティーズ・キッズ）である。六〇年代は「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」の意識が強かったが、欧米から「性革命」が導入され、後半にかけ二つの価値観がせめぎ合う¹⁰。多くの女性たちは、処女性を結婚するまで頑なに守るものとは思えないが、全く尊重しない態度も取れず、迷いながら相手との状況によって態度を決めていた。イズミは「枠」に拘り保守的な面を持つ女性で、処女性をある程度尊重はしていたが、嘉子ほどの拘り（結婚するまで処女である）は見られない。彼女が慎重になるのは、高校生が当然迷う範囲であったと言える。

彼女が「服」を脱がないのは、ハジメのイズミに対する本心に無意識に気づいていたからであろう。重要な出来事の際、ハジメはイズミを島本さんと比べていた。ハジメはイズミと初めて口づけを交わした後に「口づけをした相手が島本さんだったなら、今ごろこんな風に迷ったりはしていないだろうなふと思った」と述懐する。用心深く、傷つくことを極端に恐れる性格のイズミが、ハジメを観察し、自分ではない女性の影を感じることは容易に想像できる。また、イズミはハジメの一人っ子独特の自己完結的な性格について触れ、「それが私をときどきすごく不安にさせるの。なんだか取り残されたような気持ちになってしまおう」と述べている。イズミの分析通り、ハジメは誰かに対して心を開くということに慣れておらず、「本当の意味で彼女を受け入れてはいなかった」と認めている。自

分に心を開かない恋人に裸の自分をさらさないことは当然の選択と言えよう。このようなハジメの本心を無意識に感じていたからこそ、「用心深い」イズミは「服」という砦で彼女自身が傷つくことを恐れ、守っていた。逆に言えば、本心に気づいてしまうと崩れてしまう脆さがイズミの中にあっただのである。

ただ、嘉子と違い、イズミは一度裸になってハジメと抱き合う。「お互いに裸になってしまうと、僕らには隠すことはもう何もないように感じられた。僕は今までよりもっとイズミのことを理解できたような気がしたし、彼女の方も同じ気持ちだったろう」。幸せな時間を過ごす、叔母が来てしまう。なんとかイズミを叔母に隠れて外に出すことができたがイズミは怒り、「あなたが本当に何を考えているのが、私にはときどきわからなくなってしまおう」とハジメに対する不安を正直に述べる。このように、イズミの「服」は、イズミのことを本当に好きかどうか判らないハジメから自分自身を守るためのものであり、この段階では彼女の心の闇とまで言えない。彼女の人格が破壊されるのは、従姉との激しい肉体関係が露見してからである。

イズミは二重で裏切られたと言える。第一は、無意識で感じていた「僕のためのもの」「吸引力」がない、島本さんの下位に位置づけられている自分であった。そして第二に、それが直接的な形で現れた裏切り、嘘をついてまでも肉体関係を持ちたいと思わされるよ

うな「吸引力」を他の女(自分の従姉)に表されたということである。第一の島本さんの影は、感じていても現実に現れなかったので気づかないふりをすればよかった。しかし、従姉との行為の露見は、自分自身の存在価値を徹底的に踏みにじるものであった。ハジメは「イズミのことが好きだった。でも彼女はこのような理不尽な力を僕に一度も味わわせてはくれなかった。それに比べて僕はこの女の子を何ひとつ知らなかった。愛情を感じているわけでもなかった。でも彼女は僕を震わせ、激しく引き寄せた」と述べている。

イズミの場合、彼女の「服」は最初の段階で脱げたはずである。彼女が「服」を脱がなかったのは心を開かないハジメに対する自己防衛であった。その状態から従姉との裏切りにより、嘉子的な「粹」への拘りや傷つくことへの恐怖が最悪な形でイズミに襲いかかり、人格を破壊するに至ったのである。

三 イズミから見たテキストの価値

「拒む女」たちは二人とも不幸になっている。嘉子の場合、彼女自身の心の歪みが悲劇を生み出したといえる。しかし、イズミの場合はそのようではない。嘉子的な要素があったイズミの人格を破壊したのはハジメという人間の傲慢さである。「国境の南、太陽の西」というテキストの特徴は、主人公が悪をなす人間と自認している(もしくは開き直っている)ことである。ハジメはイズミを傷つけたこ

とを反省しない。

でも僕にはわかっていた。もしもう一度同じ状況に置かれたとしたら、また同じことを繰り返すだろうということが。僕はやはりイズミに嘘をついてもその従姉と寝ただろう。たとえそれがどれほどイズミを傷つけることになったとしてもだ。それを認めるのは辛かった。でも真実だった。

（前略）僕という人間が究極的には悪をなし得る人間であるという事実だった。僕は誰かに対して悪をなそうと考えたようなことは一度もなかった。でも動機や思いがどうであれ、僕は必要に応じて身勝手になり、残酷になることができた。僕は本当に大事にしなければいけない相手の相手さえも、もっともらしい理由をつけて、とりかえしがつかないくらい決定的に傷つけてしまうことのできる人間だった。

村上テクストにおいて、主人公が「悪」をなす人間であると自認しているものは珍しく、この「悪」は、次作の「ねじまき鳥クロニクル」（一九九四～九五）における核となる重要な要素である。ただ、この「悪をなす人間」としてのハジメはテクスト内で弾劾されることはなく、擁護され、許されている。イズミについて、高校時代の友人は「そのときに君と彼女とのあいだで何があったのかはしらな

い。でもたとえ何があったにせよ、それは君のせいじゃない。程度
の差こそあれ、誰にだってそういう経験はあるんだ」と一般化する。
更に「誰かの人生」の責任を取るのはその人自身だとハジメは擁護
される。その後、話題はディズニー映画『砂漠は生きている』へと
転換し、「本当に生きているのは砂漠だけなんだ」とイズミの話題
はすり替えられてゆく。

同様に、島本さんと逃避行をしようとしたハジメが、島本さんが
消え、家庭に戻るようになったが、その際、妻有紀子は次のような
言葉でハジメを許す。「あなたはろくでもない人間かもしれない。
無価値な人間かもしれない。あなたはまた私を傷つけるかもしれない。
でもそんな問題じゃないのよ。あなたには何もきつとわかって
ないのよ」、「何かを約束することなんか誰にもできないのよ、きつ
と。私にもできないし、あなたにもできない。でもとにかく、私は
あなたのが好きよ。それだけのことなの」。有紀子の言葉には、
同じ過ちを繰り返すハジメへの弾劾はない。過ちを繰り返す人間で
あって、これからもそうなるかもしれない「ハジメ」そのものの存
在を有紀子は受け入れている。加藤典洋氏は「この小説は、あの「心
を揺さぶるような何か」を求めることと、そのことが他者を「とり
かえしのつかないくらい決定的に傷つけてしまうこと」の間でどう
人は生きるか、ということを描く物語として、わたし達の前に置か
れる」と的確に述べている^②。しかし、結局のところ、ハジメは友人

の一般論（誰だって人を傷つけた経験がある・その人の人生はその人の責任）と妻の愛情で許されてしまうのである。「悪」をなす、同じ過ちを繰り返す人間についての追究がここには見られない。

木股氏は「ここにるのは、避けられない自らの悪を變更不可能なものとして絶対化する考え方である。意図せずに「悪をなし得る」ことを受けとめて自らが変容する可能性は閉ざされている。また、他者とのかわりによって自らが変容する可能性も閉ざされている」と卓抜した見解を示している。稿者もハジメに関しての木股氏の見解に首肯する。つまり、「国境の南、太陽の西」は「悪をなす人間」の追究としては物足りない。

稿者が考えたいのは、ハジメからではなく、イズミから見た時にテキストはどのような価値を持つのかということである。イズミに着目すると、そこには踏みじられた女性の悲劇が、救いなしで描かれていることがわかる。彼女は救われない。彼女の運命はこれからも変わらない。木股氏は「のっぺらぼうのイズミは、「僕」にとつての他者のありようを象徴している」と結論づけているが、述べてきたように、イズミはハジメの傲慢さを顕在化し、ハジメの序列や幻想を無化させる。「他者のありよう」ではなくハジメそのもの、リアルを突きつける（破壊する）女である。

テキストには「世の中には取り返しのつくことと、つかないこととがある」、「ある種のものごととは、後ろ向きには進まないのよ。

それは一度前に行ってしまうと、どれだけ努力をしても、もうもつに戻れないのよ。もしそのときに何かがほんの少しでも狂っていたら、それは狂ったままそこに固まってしまうのよ」というフレーズが複数描かれている。鈴木氏も指摘しているように「時間の不可逆性」はこのテキストの柱である。島本さんはハジメと中学校の時離ればなれになって以来、現在はおそらく有力者の愛人となっている。そういった状況を打破することができないと判断し、ハジメの前から永遠に消えた。イズミはハジメに傷つけられて以来、彼女の人格は破壊され、幸福な人生を歩んではない。現在は「無表情」から周りの人間から怖れられている。女性から見た「国境の南、太陽の西」は、取り返しの付かない物事の深刻さが描かれている。特にイズミは、傲慢さによって人格を破壊され、そのまま救われることはない。この不条理なまでの救われなさこそが、「国境の南、太陽の西」の別の特徴として浮かび上がりはしないだろうか。ハジメではなくイズミに着目すると、彼女の救われなさが浮かび上がる。彼女の顔は「虚無」の生の体現であり、人生には報われない物事があること、それ以上に取り返しのつかない物事があることをリアルに感じさせている。彼女を通して語られるニヒリズムは非常に深く、苦さが際立っている。

四 「虚無」が生み出すもの

ただ、過去に傷つけた女が再び現れ、男に復讐するという話は枚挙に暇が無い。イズミの独自性は、彼女が「虚無」を体現した「表情のない顔」で、ハジメを無言で見つめた点にある。彼女の「虚無」によって、ハジメもニヒリズムの世界に踏み込まざるを得なくなる。

「国境の南、太陽の西」というテキストは、「僕が生まれたのは一九五一年の一月四日だ」と語り始めることに顕著であるが、主人公ハジメのクロニクルという性質を強く持っている。ハジメは自分を語ることで、自分が行ってきたことを振り返りつつ、自らがどのような人間であったのかを確認している。ハジメは有紀子に「僕はこれまでの人生で、いつもなんとか別な人間になろうとしていたような気がする。僕はいつもどこか新しい場所に行つて、新しい生活を手に入れて、そこで新しい人格を身に付けようとしていたように思う。(略)僕は違う自分になることによって、それまでの自分が抱えてきた何かから解放されたいと思つていったんだ」と語る。現代人の抱える「虚無」について、西部邁氏は「自己」を喪失した自己がつねに「自己」の名において自己を語っている、これが現代社会を包む巨大な空虚感の根本因であろう」と述べている¹⁵。ハジメは自らの欠落を埋めるものを常に探しているが、このハジメの自己探しは、現代社会における巨大な空虚感と深く共通している。

しかし、島本さんに去られ、イズミの「虚無」のまなざしに触れ、自らの序列や空中庭園の価値を失った後、ハジメは自意識をめぐる病の虚しさに気づく。

僕はどこまでいっても僕でしかなかった。僕が抱えていた欠落は、どこまでいってもあいかわらず同じ欠落でしかなかった。(略)僕の中にはどこまでも同じ致命的な欠落があつて、その欠落は僕に激しい飢えと渴きをもたらしたんだ。僕はずっとその飢えと渴きに苛まれてきたし、おそらくこれからも同じように苛まれていくだろうと思う。ある意味においては、その欠落そのものが僕自身だからだよ。

自己探しの虚しさに気づき、欠落を埋めるものを探すのではなく、欠落を受け入れ、ハジメは有紀子と今一度生きようと決意する。しかし、この結末は決して明るいものではない。イズミの「虚無」によって、幻想を破壊されたハジメは自らが頼みにする幻想を新たに作り出すことはできない。結末部は次のように描かれる。

僕は台所のテーブルの前から、どうしても立ち上がるのができなかつた。体からはあらゆる力が失われてしまつていたようだった。まるで誰かが僕の背後にそっとまわつて、音もなく体

の栓を抜いてしまったみたい。僕はテーブルに両肘をつき、手のひらで顔を覆った。

僕はその暗闇の中で、海に降る雨のことを思った。広大な海に、誰に知られることもなく密やかに降る雨のことを思った。雨は音もなく海面を叩き、それは魚たちにさえ知られることはなかった。

誰かがやってきて、背中にそっと手を置くまで、僕はずっとそんな海のことを考えていた。

これまで結束について、ハジメが自己を受け入れ、新たな一歩を踏み出すというように捉えられることが多かった。確かに有希子と話し合うことで、ハジメは人生をやり直そうと決意している。本稿が強調したいのは「虚無」(ニヒリズム)である。有紀子の許しがあってもニヒリズムを通過した人間は、その乾いた認識から逃れることはできないのである。幻想を紡ぎ出すことによって生きてきたハジメは、幻想に頼らずリアルを目の当たりにする苦さをかみしめ生きるしかない。イズミの体現した「虚無」は、イズミ自体を救うことはなかった。しかし、ハジメの認識を変えたと言える。「虚無」が生み出したものとは、「幻想」に頼らず、現実をリアルに受けとめざるをえないという認識である。それは決して甘い結末ではない。有紀子からの許しがあっても、ハジメは立ち上がる力を失ったままである。島本さんや自己の空中庭園における至高の価値を剥奪

され、自分のためではない幻想を誰かのために作り上げなければならぬ。稿者は結末の解釈について、幻想に頼らず生きることの苦さ、それはニーチェが現代の宿痾であると語ったニヒリズムに通じる深さを持っていると捉えたい。

おわりに

「国境の南、太陽の西」における「拒む女」イズミは、主人公の傲慢さを映し出す鏡であり、「虚無」の力で物語を展開させる存在である。イズミは徹底的に救われず、ハジメという男の幻想を破壊し、無化させる。彼女の救われなさは、人生には報われない物事があること、それ以上に取り返しつかない物事があることをリアルに感じさせる。また、イズミの「虚無」はハジメの認識を変え、幻想に頼らずに現実を生きざるをえない苦さを描き出している。

一度狂ってしまった人生を取り戻すことができない「拒む女」は「色彩をもたない多崎つくと、彼の巡礼の年」(二〇一三)に受け継がれている。主人公多崎つくるは突然仲間たちから関係を絶たれるが、それは、性的に潔白なところのあるシロ(白根)の精神の歪みからもたらされた結果であった。シロは非業の死を遂げ、彼女の運命は悪魔に取り憑かれたと形容され、救われることはなかった。一度狂ってしまった人生を取り戻すことができない女性というモチーフは、男性主人公の運命と密接に関わっており、村上文学の一

つの特徴として捉えられるのではないだろうか。

* テキストは『国境の南、太陽の西』（講談社、一九九二）を使用した。傍線は私に付した。

注

(1) 最たるものは「ノルウェイの森」における小谷野敦氏の批判「徹頭徹尾、男にとって都合のいいセックスをお膳立てしてくれる女しか、春樹の小説には出てこない」であろう。『反』文藝評論』新曜社、二〇〇三、二六六頁

(2) かつて私は「我らの時代のフォークロア―高度資本主義前史―」における「拒む女」嘉子について考察した。嘉子が恋人との関係を「拒む」理由は、彼女の自我形成の失敗に基づくものであり、一度歪んでしまった物事は決して取り戻せない「宿命的なもどかしさ」がテキストに描かれている。（「拒む女」の闇―村上春樹「我らの時代のフォークロア―高度資本主義前史―」論―『国文学攷』二〇一四・一二）

(3) 『国境の南、太陽の西』論―海に降る雨―（初出『日本文学』二〇〇七・一一、引用は『村上春樹と女性、北海道』彩流社、二〇一三、一〇九頁）

(4) 「からっぽであることを受けいれるということ―『国境の南、太陽の西』（『国文学』一九九八・二臨時増刊、九九頁）

(5) 「剥離する〈顔〉…『国境の南、太陽の西』における「砂漠の生」の相貌」『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』二〇一〇・三、四八頁

(6) 「虚無と幻想―村上春樹『国境の南、太陽の西』論―」（『福岡大学日本語日本文学』二〇一三、三三―三四頁）

(7) 「第一書 ヨーロッパのニヒリズム I―」（『権力への意志 上』ちくま学芸文庫、一九九三、一九頁）

(8) 前出「剥離する〈顔〉…『国境の南、太陽の西』における「砂漠の生」の相貌」（『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』二〇一〇・三）、「虚無と幻想―村上春樹『国境の南、太陽の西』論―」（『福岡大学日本語日本文学』二〇一三）

(9) 「第一書 ヨーロッパのニヒリズム I―」（『権力への意志 上』ちくま学芸文庫、一九九三、二二頁）

(10) 前出「拒む女」の闇―村上春樹「我らの時代のフォークロア―高度資本主義前史―」論―（『国文学攷』二〇一四・一二）

(11) 吉澤夏子「性のダブル・スタンダードをめぐる葛藤」（『近代日本文化論8 女の文化』岩波書店、二〇〇〇）、佐伯順子「戦後民主主義社会と「貞操」の崩壊」（『愛』と「性」の文化史』角川選書、二〇〇八）、谷本奈穂「恋愛の社会学「遊び」とロマンティック・ラブの変容」（『青弓社』二〇〇八）等を参考にした。

(12) 『国境の南、太陽の西』砂漠は生きている」（『イエローページ村上春樹』荒地出版社、一九九六、一七九頁）

(13) 前出「からっぽであることを受けいれるということ―『国境の南、太陽の西』（『国文学』一九九八・二臨時増刊、九八―九九頁）

(14) 前出「剥離する〈顔〉…『国境の南、太陽の西』における「砂漠の生」の相貌」（『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』二〇一〇・三、三三―三六頁）

(15) 『虚無の構造』（中公文庫、二〇一三、三〇頁）

―やまね・ゆみえ、広島国際大学非常勤講師―